

研究専攻（専門領域）		文化環境研究専攻（芸術論）		学籍番号	07CS020
氏名	森河 有美子	ローマ字	MORIKAWA Yumiko	国籍 (留学生)	
修士学位論文名		土方巽と美術家の「共同作業」についての考察 —早期土方舞踏と同時代美術の接近、そして隔絶—			
提出年月日		2009年1月13日		指導教員	外山 紀久子
体裁 (論文)		63頁(1頁文字数1440字)		言語	日本語
別冊添付資料等		図版10頁			
キーワード		土方巽 舞踏 読売アンデパンダン展 ハプニング 1960年代			
<p>本論文は、暗黒舞踏の創始者・土方巽が1960年代に美術家と行った「共同作業」について考察したものである。「共同作業」とは、土方が舞台美術やチラシ、ポスターのデザインに同時代の美術家を起用し、彼らと対話しながらそれらの制作をしていったことを指す。1960年代は土方舞踏の早期にあたり、舞踏の理論化が成されたと考えられる1970年代に至る前の模索の時期であった。その早期の土方の考えを1960年代における美術家の状況と照らし合わせ、「共同作業」の考察を通して「土方と美術家の関係」について明らかにすることが本論の目的である。</p> <p>考察の方法として、まず具体的に舞台でどのような美術が登場したのかを、年代に沿って確認している。その後、当時の土方が記した文章等を参照しながら、1960年代に彼がどういった表現を目指していたのかを考察する。そこから、日常の身体、特に労働する身体に土方が着目し、そこに生や死、恐怖といった身体の根源的な要素を見出していたことを確認する。また同様に身体の根源にある性や暴力など社会的タブーを、土方の作品が扱ったことにも触れ、それらに着目することで身体に備わった秩序を脱し、身体の「脱秩序化」を計ろうとした土方の姿を捉える。次に、美術家との「共同作業」について考察していく。第一に、美術家が土方の舞台へ至った経緯、「共同作業」がどのように行われていたのか、「共同作業」による影響は土方と美術家の両者に見られるのか、という3点について述べる。その中から美術家が「共同作業」に至った経緯に着目し、それをもとに美術家を2組に分けて論を進めていく。1組目は土方がデビュー前から繋がりがあり、「読売アンデパンダン展」で「反芸術」の作品を発表していた美術家たち、風倉匠、赤瀬川原平らについて取り上げる。ここでは特に土方のハプニング批判から、彼が身体を使った表現に「恐怖」を求めていたこと、それに適っていた美術家が風倉匠だったことについて述べる。2組目、瀧口修造、澁澤龍彦らに評価され、土方の舞台に登場した美術家（水谷勇夫、加納光於ら）については、土方とシュルレアリスムの関係を考察することで、その舞台美術起用の背景を明らかにする。身体の「闇」を意識した土方がシュルレアリスムに関心をもち、瀧口と交流したこと。また澁澤がデペイズマンに見る「不安」と、土方の注目する「恐怖」の感情が、何気ない日常で発生するという点で共通点を持っていることを述べる。最後に土方と継続して「共同作業」した中西夏之を取り上げ、土方との間で行われた対談などから、「舞踏家」と「画家」の違いを明確にするとともに、美術家と土方の考え方の違いを述べている。</p> <p>以上により、土方が活動の早期に模索していたことが「共同作業」に明確に反映していることが分かり、その考察によって「土方と美術家の関係」の一側面が明らかになっている。</p>					